

メディア・シンポ「地方で伝える心意気」 茨城新聞局長が意義を強調

人文学部メディア文化コースの村上ゼミ、古賀ゼミが参加する4大学メディア系5ゼミ「合同ゼミ中間発表会」が11月7日午後、講義棟15番教室で



開かれ、その一環として



開催されたメディア関連のシンポジウム「地方で伝える心意気」に、茨城新聞社の菊池克幸編集局長と IBS 茨城放送業務局の高田恵一・報道防災センター長が参加、古賀教授の司会で地域報道の在り方について集中討議した。

シンポジウムに先立つ基調講演で菊池編集局長は、約5年前の東日本大震災を例に、「地域に密着して丁寧に報道しつづけることが地域報道の要。停電など悪条件が重なった震災では、全社員の奮闘で、休むことなく紙面を読者の許に届けることができた」と胸を張った。



IBSの高田センター長は、震災発生時の放送の録音を披露し、「安否確認などのきめ細かい放送を流し続け、視聴者からとても感謝された」と当時を振り返った。



シンポジウムでは、地方メディアのあり方や現状について、菊池編集局長は、茨城新聞の特長について、4年前に“県民応援宣言”したことを引用し、「全国紙が確実に減らしている中で、部数を増やしている数少ない新聞」、「違いをあえて言えば、地ダネ中心、県民の目線で伝えること。取材した後はペンペン草も生えないような取材をする全国紙に対し、地元紙の取材は、継続的だからそんなことはできない」と説明。



高田センター長は、この8月にAM放送を補完するためにFM放送をスタートしたことを取りあげて、「地方局は、ヒトもモノもカネもない。ゲリラ的にやるだけ。そうでないと正規軍に負けちゃう」と、その手法を紹介した。



デジタルへ化への対応については、茨城新聞が動画に取り組んでいることなどを言及するにとどまった。

古賀教授は、「全国紙が部数を減らす中で地方紙の健闘が目立つ。きめ細かい報道姿勢が評価されているのかもしれない」と指摘した。

コンペは茨大勢が健闘、古賀ゼミ暫定 1 位、村上ゼミ 2 位



立教大学、法政大学、大正大学と本学の 4 大学の 5 つのゼミがプレゼンテーションを競うコンペでは、立教の砂川ゼミが「沖縄の今後を考える」、法政の藤代ゼミは、「野田市におけるコウノトリを利用した PR をシティプロモーションの視点から考える」、大正大の川喜田ゼミ「宝塚歌劇団は消滅する」、茨大村上ゼミ「Welcome to Japan」、同古賀ゼミ「大学改革」を披露。シンポのゲストとして登場した菊池局長と高田センター長の採点により、茨大古賀ゼミが暫定 1 位に輝いた。2 位は同村上ゼミ、3 位が藤代ゼミ、4 位が砂川ゼミ。来年 1 月に立教大で行われる本発表で最終結果が出る。



(終)